

## 大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (60)



～ 「ボーレー、ボーレー サー」 ～

漢那木工 (元小学校長) 漢那 憲吉

近年、「スマムニで話そう」など各地区の方言大会が開催され、スマムニの大切さを見直す活動が活発に開催されています。

私の家でも日常的な会話は、両親とも方言が中心でした。農家だったので、小学校の頃稲刈りの手伝い、キビ刈の手伝いなどをすると、「ボーレー、ボーレーサー コーニー」、「ワッチャヌ ファーヤ デージ マイフナーサー」などと親や近所の大人からほめられる事がありました。その時は、子ども心にも嬉しい気持ちになり、「よし、もっとやろう、頑張ろう」という気持ちになったものです。

「ボーレーサー」「マイフナーサー」とは、宮城信勇著「石垣方言辞典」よれば、良い子、利口な子、立派など子どもをほめるときに使う方言です。この時の「サー」は、行為に感動を込めた表現だそうです。

「ほめられて伸びる子」「叱られて伸びる子」という言い方がありますが、どちらかと言うと私は、「ほめられると伸びる子」だったのかなと思います。

退職して数年が経ちました。現在は趣味の木工をしていますが、学ぶ事ばかり。年齢と経験を重ねても学ぶ事の多さと、難しさが多々あります。数々の失敗の中で、自分の技術や作品が認められた時は、やはり嬉しくなります。その時の「ほめ言葉」「助言」が次への制作活動意欲の源となるのです。

以前購読していた「PHP」という月刊誌の連載に、児童文化研究家 吉岡たすく氏の「小さいサムライたち」というコーナーがありました。内容は、小さな子供が、「先生あのね・・・」と質問で始まる話です。先生に対して悩みを話したり、疑問や質問をするのですが、先生はその時、じっと聞いていて「なるほど・・・」「よく気が付いたね」「それで〇〇さんはどう思うの？」等と、子どもの話に「耳を傾ける」ことを大切にしたのです。そして、十分に子どもの話を聞いたうえで、子ども中心の会話をしたのです。つまり、この場合、子どもの話を聞くこと自体が「子どもをほめる」行為なのです。

親や先生にとっては、大したことではない事も、子どもにとって、重要な事はたくさんあります。「・・・あのね」は、子どもなりの葛藤と思いを伝えようとする言葉なのです。「話を聞く」「耳を傾ける」という事は、「子どもをほめる」事になり、子どもの心に大きな自信と自己肯定感を育みます。家庭でも、学校でも「お母さんあのね・・・」「先生あのね・・・」は毎日のようにあるのではないのでしょうか。その時どう耳を傾けるか、どう頷くかによって子どもは「勇気づけ」られるのではないのでしょうか。

『教育するには ほめるのが一番よい』そんなことを 脳科学者の茂木健一郎氏がテレビで話しをしていました。

人はだれでも「認められたい、ほめられたい」という願望をもっています。私たちの行動の多くは、意識するしないは別として、この「自分を認めてほしい(ほめられたい)」という動機から出ていると心理学者は語っています。ですから逆にいえば、子どもの行為を認め心からほめる事ができれば、子どもは自信と自己肯定感が高まり、更に素晴らしい能力を発揮していくものだと思います。

子どもの良いところを見つけ「ボーレー、ボーレーサー コーニー」、「マイフナー マリヨー」と大

いにほめてあげて欲しいと思います。

最後に「大人でもやっぱり、ほめられたい」